どのように世界を変えることが出来ますか?

自己紹介

私の名前はアシュレー・ストラット フォードです。結婚していて、5人 の子供の父親です。現在、英国のマ ンチェスター市に近いオルトリナム という街に住んでいます。仕事は地 域の開発計画に関するコンサルタン トを担当。仕事を離れると、映画を 観たり、スポーツを楽しむことが好 きで、とりわけサッカーとかF-1 レースからは目が離せません。それ を通じての仲間付き合いもあり、F - 1 ではイタリアのコーチの方々と も面識があるほどです。(実は、私 自身アルファロメオのオーナクラブ の会員です)

オプス・デイとの出会い

私はカトリック信者の家に生まれ、 幼児洗礼を受けていますが、「一体 私の存在とは何か?」とか「どのよ うに生きていくべきか?」とか「ど うすれば、この世の中を変えること に貢献できるか」など、10代の後半になってからいわゆる普通の若者が抱くような疑問を感じ始めました。

私が、オプス・デイの教えに出会っ たのは20歳の時でした。バーミンガ ムにあるオラトリオ会の教会で修道 土をしている親友がある日、聖ホセ マリア・エスクリバーの代表作 『道』のプリントを私にくれたので す。毎日の黙想に少しずつ読むよう にすれば良いというのです。いま振 り返っても、いや現在においてもこ の習慣は、私の信仰生活における大 きな支えとなっています。修道士の 彼はその後も私のバーミンガムでの 学生時代を通していろんな形での支 援をしてくれました。その影響も あって私の精神生活ならびに神への 愛が大きく広がったのでした。

ある日の夕刻、現在の属人区の地域 代理を務めるニック・モーリッシュ 神父をはじめ何人かのオプス・デイ のメンバーがバーミンガムを訪問し ました。一般信徒における召し出し をテーマに研修会が開かれ、質疑応 答も行われました。これは私にとっ てきわめて新鮮な内容であり、何か がはっきりしたような体験でした。 司祭に叙階された方々、あるいは、 聖職に与かる人たちだけが、自分の 人生を神にささげ、神に仕える資格 があるものばかり思っていたので す。時には、司祭の道に入ることを 単純に考えてみたこともありまし た。ところが現実の私は、結婚をし て家族を持っている身です。その意 味では、オプス・デイの考え方は私 のように日常生活の中で、ありきた りの仕事をしながら、どうすれば神 に仕えることが出来るのかと悩んで いる者には、まことに相応しいもの でした。

私のいくつかの体験

オプス・デイの活動に参加すること で多くの人たちと知り合いにないかれました。やはりバーミンの 者と特に親しくなりましたが中ないる 者と特に親しくな振る舞いの中落ちに 信仰はごく自然な振る舞いのな 信仰はごく自然な振るかがわれ、彼自身の かがわれ、彼自身のた。彼して いた態度ものでした。 していましていました。

私が初めて会ったヌメラリーもえたを 力の考えた。社会人の信仰を を入の信仰を を入の信仰な考えを は活かすいに関して明解な号中に に活かするとの真ることがるといる でした。 でいるのした。 でいるがらでも神に仕えるすりに はみながらでも神に仕えるすりに に励みながら、 に励みないうとって に励みないうとって に別れて に別れて にのした。 にのした。 にのした。 にのからでも神に にという。 にはまりな発見が とって にはまりな発見が とって にはまりな発見が とって にはまりな発見が とって にはまれた。 たった。 にはまれた。 とって にはまれた。 にはまれた。 にはまれた。 とって にはまれた。 にはなる。 になる。 に

そのうちに、私は黙想会の集まりに 参加することを始めました。オック スフォードやマンチェスターにある 活動のセンターに出かけました。通 うごとに励まされて「毎日の生活プ ラン」を作り、実行することにした のです。これは、いわゆる日常の小 さなことにでも神との出会いがある ことを自覚し、「一日の種まき」と も言うべき内容でした。朝、目を覚 ました時、神の望まれるような一日 であるようにお捧げをして、仕事に 出かける前にお祈りをして、昼食の あとに福音書を読み、帰り道では、 家に着くまで「ロザリオ」の祈りを 口ずさむ・・・などです。

大学を卒業すると、旅行代理店ストークオントレントに就職しましたが、住居の近くに教会があったこともあり、毎日のようにミサに与かりました。「生活プラン」を実行することにも最適でしたし、何よりも神の存在をますます身近に感ずるよう

私の場合の召し出し

1990年のこと、すでに約4年間オプス・デイの諸活動に関わってきていたのですが、ヨハネ・パウロ2世の故国であるポーランドで開催される「ワールド・ユース・デイ(世界青年の日)」の大会に誘われま主を時あたかもヨーロッパ共産主義が崩壊を迎えた時期ですが、そのような時に誘いを受けた感動はいまだ

に忘れることは出来ません。法王パウロ2世は、大会の中ではまさにスター的存在でした。特に東欧から参加した若者たちとの出会いは格別なものがあったと思います。法王の若者たちへのメッセージは、きわめて印象的なものでした。

「聖霊よ、いまここに集う若者たちの上に降りてください!そして 若者たちよ、思いきり活躍しなさい!それを続けなさい!頑張ってください!」

このヤスナ・グラでの体験は、私の人生を変えました。神に仕えるために、もっと身を委ねなければならないと確信したのです。それから半年後の1991年1月、正式にオプス・デイのメンバーになることを申請しました。

私の家族について

結婚して11年ですが、すでに5人 の子供たちに恵まれております。家 族の存在および神との関わりをいつ も持つこと、この二つは生きていく 上で最優先と考えています。仕事を 持っている若い家族が皆そうである ように、什事と家庭生活のバランス は大変であり日々挑戦です。時々は 仕事で時間を費やすこともありま す。もちろんそのことで家族を困ら せることがないように努めてはいる のですが・・・。もっとも、死ぬ間 際にまで「もっと仕事の時間が欲し かった」などとは言うつもりはあり ません。それにしても今の世の中で は(いや、昔からそうであったので しょうが)子供たちを育てることは 容易なことではありません。しかし 神がいつも手を差し伸べてくださる と思うとむしろ大きな喜びとなりま す。妻と一緒に子供の養育に努力し ていますがカトリック信者に限ら ず、それ以外のいろいろな宗教や考 え方を持った人々にも理解を示し敬 意を払うような子供に育てたいと 思っています。子供たちの上にもい つか召し出しがあればと希望してい ますが、それは神と子供たちのこれ からの関係から生ずることであり、 任せるしかありません。

私の職業について

多くの皆さんがおそらくそうである ように、私の仕事もうまく行った り、失敗したりの連続です。期限ど おりに進まずいらいらしたり、ある いは失望することもあります。しか しどんな仕事にも意味があり、目的 があるのだと思うようになりまし た。それはすべてを神に委ねること から始まるのでしょう。きっと神 は、私たちが完全主義者であること を望んでおられないからです。望ま れているのは神へのたゆまぬ愛だと 思うのです。什事で最善を尽くすこ とによって私たちの神への愛が示さ れるのです。そんな風に私自身は理 解したのですが、実際は不平、不満、そして職場での文句は今なおあることは事実です。そんなときは、しばらくして気持ちが落ち着いたあとで神に祈るのです。「神よ、私には失うものは何もありません。すべてを委ねます。そしていつも見守ってください・・・」と。

世界の中のオプス・デイ

今、世界は神を必要としています し、人々も神を欲しています。カト リックの教えは父と子と聖霊を通いて神が私たちに関わったと関わが神の子を知ったときは、まさ身近にもると知」でした。いつもがにもがいていたとにも相談相であるからです。

これらの活動を担うためにオプス・デイは実にからいと思うと思いる自分を要にからいてするとを実践しているもず、そしているもず、ですまです。はしているです。です。なり、ですがすべてものに変えてものに変えてものに変えてもかがすべてものに変えてしまうのです。

最後に

私たち自身への問いかけがまだあります。今それぞれが暮らしている場所から、どのようにして世界を変えることが出来るのでしょうか。

聖ホセマリア・エスクリバーは、これに対して、天の父に委ねるように私たちに助言されています。そうすれば、心の平和と想像も出来ない多くのお恵みに与かると云っておられます。

「夢を見なさい。予想を越えて早く 実現しますよ!|

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/donoyounishi-jie-wobian-erukotogachu-lai-masuka/ (2025/12/15)